小野

北播初のホームホスピス

第二のわが家で人生を全う―

北播磨地域で初めてのホームホスピス「和ははの家」（定員7人）が小野市住吉町のスーパーフジワラ跡にできた。高齢者が地域で安心して暮らせる家のような施設。病気や障害があり、自宅での生活が難しくなっても住み慣れた地域で最期まで人生を全うする「もう一つの家」を目指す。（坂本　勝）

和ははの家の外観。スーパーの名前をあえて残した

「和ははの家」開設

看護、介護 チームで支援

ホームホスピスはケアを必要とする人々が「第二のわが家」として暮らし、看護や介護をチームで支援する仕組み。全国ホームホスピス協会（宮崎市）によると、国内には約70カ所ある。兵庫県内では和ははの家が9カ所目で神戸・阪神間と姫路市以外では初めて。

日本財団はメットライフ財団の寄付を受け2021年度から、山梨県から鹿児島県まで全国10カ所にホームホスピスを開く計画で和ははの家も支援を受けた。

7月23日に住吉町公民館で開所式があり、開設した特定非営利活動法人「和ははは」（加東市天神）代表理事の小林あす香さん(43)＝同市下久米＝をはじめ、地域住民や関係者ら約40人が集まった。神戸市内に「神戸なごみの家」を開いた同協会の松本京子副理事長は「1階のスーパー跡が生まれ変わった。和ははの家が入所者の大切な住まいになるように引き続き支援を」と呼びかけた。

日本財団の福田英夫部長は「スーパーから生活を支える拠点となった。全国にこういう施設が広がる必要がある」と話した。メットライフ生命保険の長尾宗尚執行役員は「アンケートに『ホスピスを利用したい』と答えた人は70％。一方で『利用したいけど遠くにあって利用できない』と答えた人は兵庫県が全国一多かった」と紹介した。

開所式の後、関係者は和ははの家に移動し、玄関前でテープカット。前傾姿勢で排便しやすいように工夫されたトイレやリフト付きで利用しやすい浴室、地域交流スペースに使われる和室、明るく広々とした食堂などを見学した。

開所式後、和ははの家を案内する小林あす香さん（右）＝いずれも小野市住吉町

和ははの家　小野市住吉町652の2。定員7人。職員は看護師9人、介護士5人、調理師1人。24時間365日運営。訪問看護ステーション、藤本在宅医院（小野市粟生町）と連携し、福祉用具を完備。NPO法人「和ははは」☎0795・20・2191

「笑って暮らす手伝いを」

開設者・小林あす香さん

「和ははは」代表理事の小林あす香さんは、訪問看護師として活動しながら奔走し、財団の支援を得て、実家隣のスーパー跡に念願の「第二のわが家」を開いた行動力の持ち主だ。

小林さんは小野高校、播磨看護専門学校を経て看護師になった。25歳の時、3カ月の船旅で地球を一周するピースボートに参加。ヨルダンやリビア、パレスチナの難民キャンプを訪れた。船内では広島市で被爆し、カナダ移住後も核兵器廃絶を訴え続けるサーロー節子さんの体験談を聞き、海外支援に関心のある医療従事者とも交流した。

旧三木市民病院や青野原病院などで働いた後、三木、小野、加東市で在宅生活を支える訪問看護師として活動し、10年になる。

病棟勤務時代、「最期までいつも通りに」と望む患者や家族の声に「現場では難しい。どうしたら」と悩んだことが出発点となった。地域のガソリンスタンドを社交場のように訪ね、病気になる前から住民と関わり、グラウンドゴルフの熱中症対策などを勧めた。

訪問看護でも、住民のつぶやきを拾って生かすよう心がける。無料で相談に応じる「暮らしの保健室」を開設。「心とおなかはつながっている」と便秘や軟便の相談に関心を持ち、オンラインで「うんこを語ろう会」を立ち上げるなど活動はユニークだ。加東市の民生委員も務める。

「うんこを語ろう会」の会長としても活動した（提供）

スーパーを切り盛りした父の藤原保男さんは20年前に吐血して亡くなった。51歳の働き盛りで過労死だった。ホームホスピスは当初、加東市で物件を探していたが、母さつきさん(71)がスーパー跡を勧めてくれた。地元説明会で住民が受け入れてくれたのも「地域に溶け込んでいた両親のおかげ」と感謝する。

「利用者が笑顔になるには職員から」と子ども連れの勤務や自分自身をいたわる働き方を勧める。「子どもから高齢者まで地域住民がごちゃまぜになって暮らし、人生の最期まで『わはは』と笑って楽しく暮らす手伝いをしたい」（坂本　勝）

(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。